

よこあなほ
稲城の横穴墓稲城市東長沼2111
☎042-378-2111
発行 2007. 3.15

横穴墓は、丘陵の斜面や崖面などに横穴を掘って造られた古代の墓です。内部の構造は、玄室・羨道・羨門などを備え、数基から数十基で群集して造られることが多く、広義の古墳の一つとして考えられています。横穴墓の起源は、5世紀後半頃北部九州で発生し、やがて全国に広がりますが、関東地方では、6世紀後半頃に伝わります。多摩川・鶴見川流域は、関東でも有数の横穴墓の密集地帯で、6世紀末～8世紀にかけて多くの横穴墓が造られ、広範囲に分布しています。

稲城市域では、現在までに3か所から6基の横穴墓が発見され、調査されています。鶴見川水系の坂浜横穴墓1基、平尾馬場横穴墓群3基、多摩川水系の大丸横穴墓群2基です。

坂浜横穴墓は、坂浜743番地付近で、丘陵の尾根部の下（標高106～108m）から、下水工事中に発見されました。平面形が羽子板型で、玄室・羨道・閉塞施設・天井がほぼ完全に残り、全長4.9mの規模でした。玄室は、前室と後室に分かれる複室構造で、玄室（前室・後室）、羨道部の各室の境には大型礫が並べられ、玄室床面には万遍なく小石が敷き詰められていました。この玄室部からは、4体分の人骨が発見されており、この地域の有力家族の合葬墓であることが判りました。

平尾馬場横穴墓群は、昭和34年と昭和42年から43年にかけて2度調査が行われ、計3基の横穴墓が発見されました。平尾住宅の中の丘陵斜面（標高62～63m）に3～4m間隔で、小型の横穴墓が3基並んで造られていました。3基のなかでも2号墓が規模が大きく、平面形が羽子板型で、玄室床面が羨道床面より36cmほど高く、高棺座の形態が特徴となっています。出土遺物は玄室から金環（耳飾り）が2個（径約1.7cm）が発見されています。他の2基は2号墓より規模が小さく、出土遺物は発見されていません。

大丸横穴墓群は、昭和56年から始まった多摩ニュータウンNo.513遺跡（大丸城跡）の調査により、中世城跡の斜面から2基の横穴墓が発見されました。1号墓は、羨道部分がすべて確認されていませんが、平面形が羽子板型で、小型の横穴墓でした。出土遺物は墓前域から土師器の埴が1個だけ発見されています。2号墓は大型の横穴墓で、全面に石敷きされた逆台形型の玄室は長さ約2.6m有り、それに続く羨道

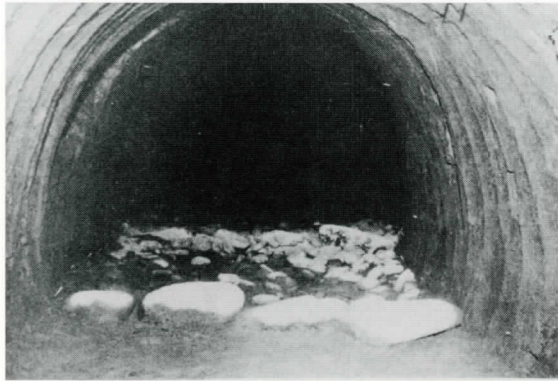


大丸2号横穴墓（東京都埋蔵文化財センター提供）

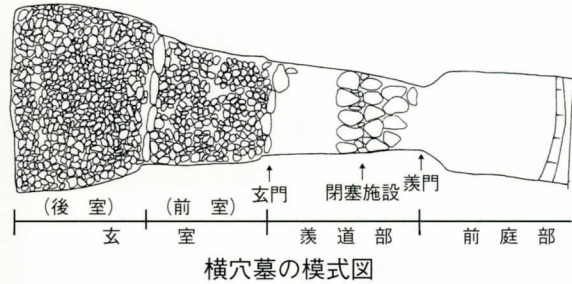
部は狭く幅約0.5mしかありませんでした。羨道部手前の墓前域に残っている部分で長さ約3.9mもありました。出土遺物は墓前域から須恵器の広口短頸壺が1個だけ発見されています。出土遺物の時期は、1号墓の土師器が7世紀中期～後半、2号墓の須恵器が7世紀後半と推定されています。

これらの横穴墓の構築時期については、出土遺物が少なく時期の確定が難しいのが現状です。しかし大丸横穴墓群の出土遺物や、鶴見川流域の他の横穴墓群と比較して、ほぼ7世紀後半頃の築造と考えられています。坂浜横穴墓の複室構造や平尾馬場横穴墓2号墓の高棺座構造は、鶴見川流域の横穴墓と関係が深く、鶴見川本流の地域から支流の奥地開発に進出した有力豪族の共同墓地であった可能性も考えられます。

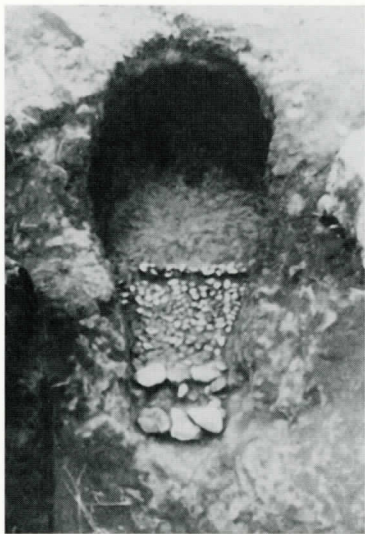
参考文献、『稲城市史上巻』（稲城市）



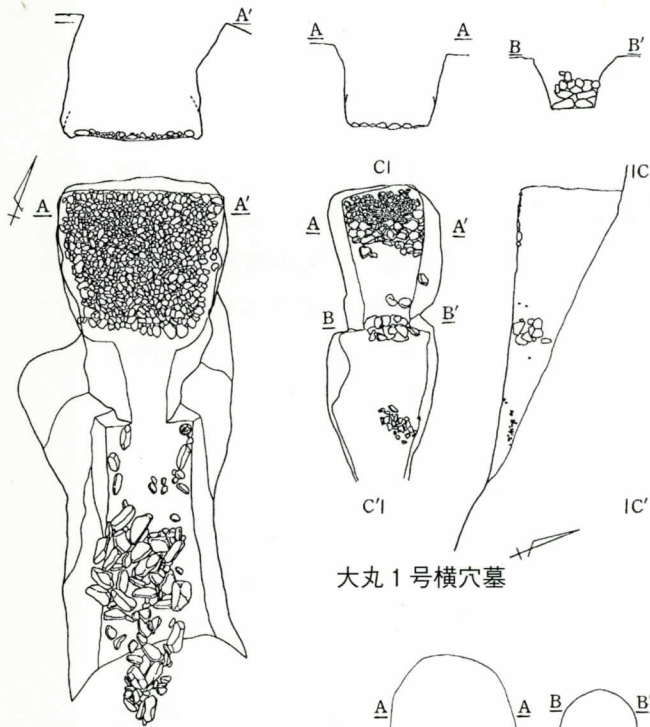
坂浜横穴墓の内部



横穴墓の模式図

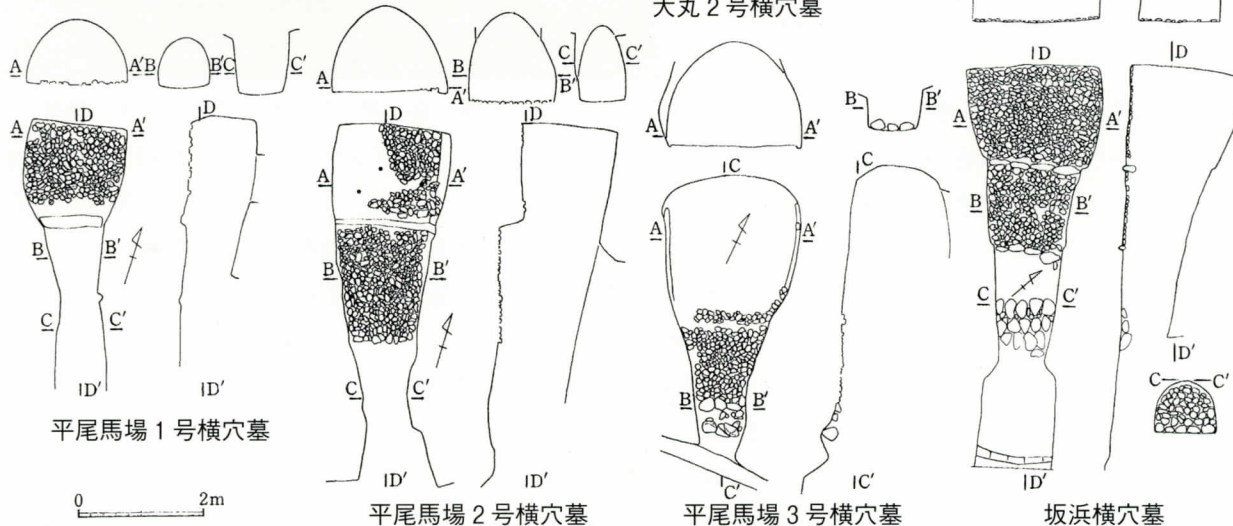


平尾馬場3号横穴墓



大丸1号横穴墓

大丸2号横穴墓



平尾馬場1号横穴墓

平尾馬場2号横穴墓

平尾馬場3号横穴墓

坂浜横穴墓